

Music bring Peace

平和は楽しい (趣旨)

「人の心に平和のとりでを築くコンサート」のタイトルは、ユネスコ憲章前文の宣言「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」から取っている。

第二次世界大戦での犠牲者は約8,500万人ともいわれるが、主たる原因は交戦国が「国民国家」で、国家総動員体制のもと非戦闘員までが被害にあったことにある。「国民国家」は「愛国心」が前提となるが、「愛国心」が国家、民族間の不信、差別の暴走を生み、これが戦争の主たる原因となった。このため「国際連合」設立に当たり、以前の「国際連盟」が平和を目的としつつも政治交渉のみの機関であったことへの反省から、「心」の問題にまで踏み込んでユネスコ「国連教育科学文化機構」の設立となった。広島は「被爆の町」、または「被爆者の町」として、非戦の誓い「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」の実現に努めてきた。また広島の再建、復興に際して特別立法「広島平和記念都市建設法」の恩恵を受けているが、国内120の被災都市のうち広島だけが特別立法の対象になったのは、「科学の進歩が限界を超え、兵器の発達は人類を絶滅の危機に追い込みかねない。もはや戦争をすることは不可能である」という故濱井信三氏(当時広島市長)の主張が占領軍や吉田茂首相(当時)から「これは都市や国家の枠を超えた地球・人類の課題である」という理解を得て、衆参両議場一致で法律化した。同法は今でも生きており、と言うことは、「広島」は戦争廃絶の義務を、今でも負い続けていることになる。

「被爆の町」は、それ自身善と考えられていた科学の研究が大量

殺人兵器を生み出すに至った科学者の責任の記録として今後も引き継がなければならない。一方「被爆者の町」は近い将来、被爆者の消滅によって証言能力を失う。

何よりも、いずれも「悲しい記憶」の持続によって、その反対側にある「平和」を発信しようとするため「平和」を強調するためには悲劇性を強調せざるを得ないという「暗さ」が付きまとう。また、心の底に「うらみの連鎖」が引き継がれる可能性がゼロではない。世代交代の時期である終戦70周年を区切りに、「平和であることは楽しい」という明るい発信があってもいいのではないか。ユネスコが目指した「平和のとりで」の目的に合致するのではないか。

「平和は楽しい」の目的を達成するためには、音楽がもつともふさわしい。音楽には国境がなく、言語、宗教、民族の壁を乗り越え、調和を生む力がある。音楽の共有によって、「うらみの連鎖」を昇華させることができる。

小澤征爾氏はクラシック音楽について言う。

「発祥は欧州であるが、世界中誰もが平等にすばらしさを享受できる。音楽は共通語として世界をつなぐ。世界的なオーケストラの仕事を通じて、理想的な民主主義のあり方を経験させてもらった」(読売新聞より引用)。

小澤氏は世界最高水準の指揮者であるが、演奏の技量に差はあっても、音楽共通の本質を語っている。いろんな民族、国々が音楽を共有することが、回り道であっても平和実現の有力な手段であると確信している。

理事長 松尾 康二